

## 審査の結果の要旨

氏名 高山 由貴

カウンセリング初期はその後の展開を予測しうる重要な時期であるが、その段階でどのようなことが起きているのかは明らかでない。そこで本論文は、クライアントの主観的体験に基づき、初期に面接内と面接間の双方で起きている出来事に注目することでカウンセリング・プロセスの検討を行うことを目的とした。論文は、従来の研究を整理し、課題を明らかにする第Ⅰ部、初期の面接内のクライアントの主観的体験を研究する第Ⅱ部、初期の面接内・面接間双方におけるクライアントの主観的体験を研究する第Ⅲ部、研究成果の臨床群への転用可能性を検討する第Ⅳ部、結果を総合し、臨床的示唆を提示する第Ⅴ部から構成される。

第Ⅰ部1章では、カウンセリングのプロセス研究がカウンセラー視点の事例研究で占められていたのに対してクライアントの主観的体験に注目して面接内と面接間のプロセスを研究する意義を述べ、2章で先行研究をレビューして論点を整理し、3章でプロセス研究の方法として採用する対人プロセス想起法（IPR）の手続きを解説し、4章で論文の構成を示した。

第Ⅱ部5章（研究1）ではロールプレイ／試行カウンセリングのクライアント10名の面接内体験のIPRデータを質的に分析した結果、話の深化がなくても不満の表明がないため、カウンセラーの側でその可能性を認識することがドロップアウト防止につながることを示唆された。6章（研究2）ではケース・マトリックスと事例比較による上記データの分析の結果、話の深化には傾聴だけでなく、クライアントが受け入れられた感覚を持つことが必要であり、受け入れられた体験がないクライアントは感情を抑制する傾向があることが示唆された。

第Ⅲ部7章（研究3）では、短期（3回）試行カウンセリングの1ケースを対象とし、面接内と面接間双方のプロセスに関する体験・ナラティブ指向事例研究を実施した。面接記録とIPRデータの質的分析の結果、「面接は日常会話と異なる意義をもつ」等のクライアント独自の面接観をカウンセラーが共有することの重要性が示唆された。さらに8章（研究4）では、研究3の知見の検証と発展を目的として4名の短期試行カウンセリングのIPRデータを質的に分析した結果、面接内では「対人接触による気づき」「治療関係の進展」「面接構造の形成」が生じ、面接間では「行動や認知の変化」「カウンセラーの内在化」「面接の内在化」が生じ、それらの相互作用によってプロセスが進展することが明らかとなった。

第Ⅳ部では、研究4までの非臨床群を対象とした知見の、臨床群における転用可能性を検討するため、2臨床事例のクライアントにインタビュー調査を実施した。その結果、9章（研究5）では、臨床群でも日常生活の変化に向かうプロセスを確認した。さらに10章（研究6）では、その変化が直線的でない場合もあることが明らかとなった。そこから、面接内／面接間の相互作用という観点から、面接過程のチェックポイントとなりうることを示唆された。

第Ⅴ部11章では研究の成果をまとめ、12章で本研究の限界と今後の展望を述べた。

本論文は、カウンセリングでは特にその初期で面接内のプロセスが面接間のクライアントの認知や行動に影響を与える一方、面接間のプロセスは面接内のプロセスに影響を与える相乗効果があることを具体的に示した点で特に意義が認められる。よって、本論文は、博士（教育学）の学位を授与するに相応しいものと判断された。